

# オスマン帝国近代における「女性」誌の誕生 (1869-1909)

松尾 有里子

## はじめに

本稿は、オスマン帝国近代における1869-1909年に出版された「女性」新聞・雑誌を中心に、発行の趣旨、編集者、執筆者の顔ぶれとその言論活動、及び投書欄に見る読者層などを時系列に整理しながら、「女性」を対象とした出版文化の成立の背景と社会的意義を考察しようとするものである。

1860年代のオスマン帝国では、タンズィマート（制度の再編）と呼ばれる一連の近代化改革（1839-76）が社会に浸透し始め、首都を中心に民間の新聞、雑誌が相次いで創刊された。そこでは近代教育を受けた新しい知識人が牽引する政治、社会、文化的言論市場が形成されつつあった。このような潮流のもと1869年イスタンブルにおいて、ムスリム婦人（muhadderât）への啓蒙（okutulması）を目的に『婦人版進歩（*Terakkî-i Muhadderât*）』新聞が発行された。これは帝国初の女性読者を対象にした週刊新聞であった。この後、トルコ共和国初期にかけて個性あるオスマン語の女性誌が出版され、独自のメディアを築いて行くこととなった。

このオスマン帝国末期の一連の女性誌については、社会学的アプローチからクルナズ（1990）やチャクル（1994）による先駆的研究がある<sup>1</sup>。両者とも問題関心がフェミニズム、女性解放運動にあるため、フェミニストの言説研究が中心であった。一方、フライアソン（1996）はアブデュルハミト2世期（1876-1909）の女性雑誌の大衆化に着目し、ジェンダーと公共性の問題を論じた<sup>2</sup>。先行研究では、いずれも女性誌を時代の趨勢のなかに位置づけてはいるものの、一連の出版活動がどのような社会的需要のもとに生まれ、興隆するに至ったのか、その実態は未だ不明であり検討の余地を残している。本稿では、雑誌の担い手である編集者、読者の動向を分析することで、女性誌メディアの成立過程の検証を試みたい。

## 1. 「女性」誌の成立

### (1) 「女性」向けメディアの興隆と画期

現在、オスマン帝国末期から共和国初期にオスマン語で出版された「女性」新聞・雑誌については、女性著作物図書館（Kadın Eserleri Kütüphanesi）のトスカ他の研究員によってイスタンブルの図書館所蔵の38誌の目録が作成され、その全体像が徐々に明らかになっている<sup>3</sup>。この情報をもとに帝国末期に出版された女性誌を時系列に整理すると表1となる。これら33冊は家庭婦人向けの家政、育児全般の情報誌という共通項を持つものの、政府の女性政策や出版事情等に照らしてその内容に時代的変化が認められるため、以下の三つの画期に分けることが可能である。すなわち(1)タンズィマート末期（1869-1876）(2)アブデュルハミト2世期（1876-1909）(3)第二次立憲政期以降（1909-1923）である。

オスマン帝国では1831年に初めて新聞『官報 (Takvîm-i Vekâyi)』が発行され、その約30年後の1860年に初の民間新聞『情報通詞 (Tercümân-ı Ahvâl)』が生まれた。オスマン朝政府は1857年印刷条令 (Matb'aa Nizamnamesi)、1864年出版印刷条令 (Matbû'ât Nizâmnâmesi) を発令し、新聞、定期刊行物への監視と規制を強めた<sup>4</sup>。さらに、アブデュルハミト2世の「専制」時代になると、政治的言論に対し厳しい統制がなされ検閲も行われた。しかし政治を除く分野では、新聞、雑誌類の創刊が相次ぎ、言論・出版業界は活況を呈した。つまり、一定の制約を伴いながらも手続きを踏めば、誰もが自由に新聞や雑誌を発行できる状況が到来していた。「専制」が終わった1909年には政論が復活し、政治問題を扱う女性誌も現れ新たな展開を見せて行く。本稿では女性誌メディアの成立期である第1期と第2期初期に発刊された新聞、雑誌群のうち、入手し得た4誌を分析の対象とする。

## (2) 女性読者の出現

『婦人版進歩』新聞は一般紙『進歩 (Terakki)』(1868年創刊)の姉妹紙であった。どのような経緯及び意図から、婦人版を新たに立ち上げたのであろうか。その手がかりとなるのは、『進歩』紙上に投稿した女性読者の存在である。ファイカと名乗る婦人が編集部宛てた手紙を見てみよう。

以前は年老いたキリスト教徒の女たち (kokonalar)<sup>5</sup>が外套 (entari)の補整のため家まで来て、5リラか10リラを謝礼として払いました。欧州の製品を買うために私たちが支払っていたのは5クルシュでした<sup>6</sup>。このようなやり方が世間に流布しているのに、私たちはこれまで通りなのですか。欧州の手工芸は洗練されています (中略)。しかし神は私たちにも手と知性を与えて下さいました (中略)。キリスト教徒の女に払うのではなく自分たちで稼ぎたいのです<sup>7</sup>。

この投稿者によると、ムスリム女性も洋裁を通じ、経済的自立を果たしたいと訴えていた。その他、イスタンブールの風紀の乱れや女兒の教育のありかたなど、家庭婦人の目から当時の変容する社会に対し、疑問や矛盾などを記名入りで、もしくはペンネーム、匿名で訴えていた<sup>8</sup>。投稿者の大半は、都市部に居住するムスリム女性であったが、これまで公文書では原則「個人」として記録されず、普段は私的領域で過ごすことの多い家庭婦人が自らの意見を公に披瀝するのは画期的現象であった<sup>9</sup>。このような家庭婦人の投稿を見て、潜在的読者層を見だし、『婦人版進歩』紙創刊の動機となったのではなからうか。

## II. 初期「女性」誌の特徴

1869年に『婦人版進歩』紙が週2回発行され48号まで続くものの、その後現れた70年代の2誌、80年代の6誌のいずれもが数号で廃刊となっていた。しかし、この女性誌揺籃期ともいえる時代には、短命とはいえ様々な個性ある新聞、雑誌が生まれた。なかには、単なる女性に関係する情報の発信だけでなく、女性が主体的に記事の執筆、編集、出版に関わる雑誌も現れ、90年代以降の女性雑誌の興隆と大衆化の要因を考えるうえでも示唆的である。以下に初期の4紙の概要と特徴を述べる。

### (1) 『婦人版進歩』(1869-1870) 1-48号

第1号前文 (mukkadime) には、「ムスリム婦人のために初めて (ilk) 編まれた啓蒙の雑誌であり、有益な情報 (malumât) と告知 (ilânât) を目指す」ため出版を許されたと明記されている。週1回日

表(1) 「女性」新聞・雑誌 (1869-1923)

	雑誌・新聞名	発行年	発行人・主筆	目的・内容・特徴
1	『婦人版進歩』 (Terakki-i Muhadderât)	1869	Ali Raşid Bey	教育、社会、西欧女性の活動等の紹介
2	『鏡』 (Ayine)	1874	Mustafa Hamdi	子の教育、結婚生活
3	『婦人の時間と教育』 (Vakit YahutMürebbi-iMuhadderât)	1875	Filip	育児、家政全般
4	『家族』 (Âile)	1880	Mihran, Şemseddin Sâmî	育児、家政全般。サーミーが全て執筆。
5	『人間』 (İnsâniyet)	1882	Mahmud Celaleddin	女性の啓蒙が目的、百科事典的知識を提供
6	『婦人』 (Hanımlar)	1882	Câfer	育児、家政全般
7	『花園』 (Şükûfezâr)	1883	Arife Hanım	女性編集者のみの雑誌
8	『めぐみ』 (Mürüvvet)	1885		婦人版『Mürüvvet』
9	『買い物袋』 (Parça Bohçası)	1887	Semiha Râbia Kâmile	家庭婦人向け
10	『婦人専門新聞』 (Hanımlara Mahsûs Gazete)	1893	İbnü'l-Hakkı Mehmed Tahir, Ahmet Reşit, FatmaSâdiye, Mehmed Sadık	西欧の女性専門誌に倣い、女性の進歩に役立つ情報を提供
11	『婦人専門情報』 (Hanımlara Mahsûs Mâlûmât)	1894	Mehmed Tahir	文学、倫理道德、芸術
12	『女性年報』 (Takvim-i Nisâ)	1899	Ebuzziya Tevfik	育児、世界の女性
13	『優美』 (Mehâsin)	1908	Asaf Muammer, Mehmed Rauf	女性の権利、社会問題、
14	『花束』 (Demet)	1908	Hakk Bey	政治、社会、教育
15	『女性』 (Kadın)	1908	Mustafa İbrahim, Enis Avni	『Tanin』紙の協力、政治、社会、女性問題
16	『女性』 (Kadın)	1910	Nizâmeddin Hasip	社会、教育、文学
17	『女性の姿』 (Musavver Kadın)	1911	Nizâmeddin Hasip	政治、文学、科学
18	『女性』 (Kadın)	1911	Nizâmeddin Hasip, Ali Sehâ	女性の社会、科学への啓蒙
19	『女性世界』 (Kadınlar Dünyası)	1913	Nuriye Ulviye, Emine Seher	女性の権利、地位向上、文芸、翻訳等
20	『婦人世界』 (Hanımlar Âlemi)	1913	Mehmetd Asaf, Ahmet Cevdet	図絵入り文学、社会情報誌
21	『男性世界』 (Erkekler Dünyası)	1913	Rifat Bey	両性の平等に意識的な若者向け情報誌
22	『潮流』 (Seyyâle)	1914	Adile Necati, Şekibe Ali, Sâlime Servet	若い女性向け情報誌
23	『平等』 (Siyânet)	1914	Zaime Hayriye	社会、文学、科学、経済、家政
24	『女性』 (Kadınlık)	1915-1916	Hacı Cemal, Süleyman Tevfik, Nigâr Cemal	女性の権利、地位向上を目的
25	『女性生活』 (Kadınlık Hayatı)	1915	Emine Seher Ali	文学、科学、社会
26	『知識の家の光』 (Bilgi Yurdu Işığı)	1916	Ahmet Edip	「知識の家婦人部」の広報誌

27	『若い女性』 (Genç Kadın)	1918	Seyyid Tahir, Hatice Refik	
28	『若い女性』 (Genç Kadın)	1918	Fuat Şükrü, Fatma Fuat, Süleyman Tevfik	青年女性向け倫理道徳、文学、教育問題
29	『トルコ女性』 (Türk Kadını)	1918	Ahmed Hilmi, Ahmed Halit	文学、政治、フェミニズム
30	『真珠』 (İnci)	1919	Sedat Simavi	主婦と働く女性向け情報誌
31	『婦人』 (Hanım)	1921	Sedat Simavi	婦人問題、流行、写真、図絵豊富
32	『女性の王国』 (Kadınlar Saltanatı)	1920	Sedat Simavi	大衆紙。写真、図絵豊富
33	『家庭教師』 (Ev Hocası)	1923	Ahmed Edip	子どもの教育、家政

曜日にイスタンブールとその近郊の11カ所 (Beşiktaş, Bebek, Rumeli hisarı, Yeni köy, Yeni mahalle, Üsküdar, Beykoz, Kalınca, Anadolu hisarı, Vanköy, Hasköy) の専売所で販売された。発行人は『進歩』紙と同じくアリー・ラシド (Ali Raşid) で、チチェクパザルにある教育・啓蒙団体のオスマン学術協会 (Cemiyet-i İlmîye-i Osmaniye) を通じて印刷、出版された。

第1号は前文の後に、手紙の読めない女性のエピソードを交えて女性のリテラシーの必要性を述べた論説 (makâle) が続き、ニュース (havâdis)、告知 (ilân) の全4頁から成っていた。啓蒙の観点から、フランスにおける婦人参政権付与の話題もとりあげている。第2号以降も4頁のなかに論説、ニュース、告知欄が占める形態は続き、47号まで252の記事が掲載された。

注目すべきは、3号以降に増えた女性読者の投稿記事である。これは多いときには紙面の5割を占め、ときに紙数が8頁にまで拡大することもあった<sup>10</sup>。例えば第3号の場合、読者の投稿記事は、編集部への感想や要望を伝えた手紙 (mektup, varaka) と自説を述べた論説や自作の詩・小説から成っていた。彼女たちの多くは「ソフィア在住のレイラ」など名前を記していたが、なかには匿名や「お勉強好きな婦人 (maarifî sever hanım)」など滑稽なペンネームで投稿していた<sup>11</sup>。では、最初の投稿者ベルケスの手紙を見てみよう。まず、「私たちのために出版されたこの新聞を第2号まで読みました。とても嬉しく思います」との書き出しで始まり、次にイスタンブールの海峡の内側に住んでいないため専売所に赴けず入手に苦勞し、予約購読者 (müşteriye) となった旨を述べ、地方都市に住む女性にも送るべきだと注文をつけた。さらに第1号の記事についての感想が続く。「前文や助言等の部分は理解できましたが、本当のことを言えば、いくつかの表現 (tabî) や言葉を知りませんでした。やむをえず私の父へ助けを求め、(理解するのに) 困難な状態 (hal-ı müskül) にいたのです」と読解に若干難を要したと告白した後、「男性や10年以上も著述 (kitâbet) に専念している紳士ですら、第1号に出て来たいくつかの単語を知らなかったのです」と男性に訊いても役に立たなかった顛末を述べた。そして「私たちは男性たちが言葉を知ろうが知るまいが構いません。私たち専用の新聞が流暢 (selis) でいきいきとした (nefis) 文章であることを望みます」と『婦人版進歩』紙の今後に期待を寄せている。手紙の末尾には「毎週あなた方の新聞へ掲載されるよう (原稿) 一枚 (bir kağıt) 送るようにします」との一言が添えられていた<sup>12</sup>。この言葉通り、彼女は投稿を続け第4号にも手紙が採用されている<sup>13</sup>。ベルケスのような若い女性だけでなく子育て中の

家庭婦人からの投稿も多かった。例えば、2人の女兒を育てるハイリエは、家庭教育の重要性を説き、「現在、私たちは若い時分 (tâzelligimizde) に、(女性が学ぶうえで) 男性が恥 (ayıp) と感じるような事柄を学んだり書いたりしています。私たち婦人は (かつてのように) 人間 (insân) とみなされない、動物 (hayvan) のような状態のままではいけないのだ、と理解したのです」と述べた<sup>14</sup>。読者の投稿が増えるにつれ、編集部側からも結婚、女子教育のありかた、乳児の健康、女性の美德等のテーマを掲げ、読者の意見を募ったりした。また、欧米の一般紙の要約を載せ、西欧社会における女性事情などにも度々触れている。例えば、婦人の政治参加についてイギリスの新聞から得た情報として「婦人も国会議員になる権利を得れば、いつか閣議で発言する婦人も現れるでしょう。(中略) しかし、その婦人が子どもに授乳するのに忙しいなら閣議に出られないでしょう」と述べている<sup>15</sup>。

読者の投稿欄は、女性読者が男性編集部員と日常生活から生まれた家事、育児、子どもの教育、保健衛生等の問題を話し合う交流の場として機能しており、当該新聞が必ずしも情報発信のみに特化した新聞ではなかったことを伝えている。このような読者の投稿を含めた紙面づくりは、その後の『鏡 (Ayine)』(1874)『婦人の時間と教育 (Vakit Yabut Mürebbi-i Muhabberât)』(1875)にも継承され、女性向け雑誌の標準型として定着していくこととなる。

## (2) 『家族 (Aile)』(1880) 1-3号 (写真1)

80年代に入り、アルバニア人ジャーナリストで言語学者でもあったシェムセッティン・サーミー (Şemseddin Sâmî) が主筆を務めた『家族』が発行された。イスタンブールのパープアーリー (官庁) 通りに面したミフラン (Mihran) 印刷所が印刷、出版した。第1号の冒頭には「家族、女性たち、子どもたちと家事 (ev işleri) について様々な問題を集めた雑誌」と明記されている<sup>16</sup>。家庭婦人への啓蒙を目的にサーミーが記事の執筆と編集を全て手がけたため、投稿を通じた女性読者との交流の場は設けられなかった。雑誌の内容は、テーマが予め決まっており、家政 (ev idâresi)、健康 (sihhat)、裁縫 (iğne ve makâs)、子どもへ読み聞かせするお話 (çocuklara hikâye)、遊戯 (oyun)、家庭の問題 (mesâil)、女性の責務等の小論が述べられた。

近代イスタンブール社会の家族形成を分析したデュベンらによれば、19世紀後半の首都ではバルカンやアナトリアからの移民で人口が増加し社会の構造的変化を迎えており、さらに普通科教育の普及により新たなエリート層の創出と核家族化が進んでいた点が指摘されている<sup>17</sup>。サーミー自身もアルバニアからの移住者であり、彼によれば家族とは「男性、女性、子ども、その他の者たちから構成されるファミリア (familya)」であった<sup>18</sup>。

『家族』で度々登場する子どもへの教育的挿話も当時の変容する社会の動向を踏まえて創作されたと考えられる。例えば、サーミーは妻エミネの名をつけた女兒を主人公に移住者との共生を説いている。

エミネは9歳のとても美しく、お行儀の良い女の子です。  
お母さんはいつもエミネのことを何でもきいてくれます。  
なぜなら、エミネは認められないことは何も望まないからです。  
ある日、エミネはお母さんのところへ走って向いながら  
「お母さん、私の6組の洗濯し終わった物 (洋服) があったでしょう。  
5組分を別にしておいてもいい？」と訊きました。  
「いいわよ」

「だったら、門の前で裸足の小さな移民 (muhâcir) の女の子がいるから一つをあの子に渡したいの。私の古いスカート (fistan) と靴 (kundura) があるでしょう。私が着ないまま放っておいているものよ。これをあげたいの。」

「もちろん、いいわよ」とお母さんは言いました。

ある日、エミネが学校から帰って来て、洋服ダンスを開けると、5組の洗濯した物と新しい1つの洗濯した物、それに新しいスカートと靴が入れられていました<sup>19</sup>。

80年代は上記のような学童の教育、しつけを目的とした家庭での読み物『子どもの友 (Çocuklara Arkadaş)』(1882) 等が出版された時期でもあった<sup>20</sup>。Ph.アリエスはかつて『子どもの誕生』でヨーロッパ近代における家族の特徴として a.夫婦間の伴侶性と親子間の強い感情的な絆 b.子どもへの教育責任意識の高まり c.プライベートな空間の重視と社会への閉鎖性 d.性別役割分担 をあげた<sup>21</sup>。オスマン社会における「近代家族」の形成がいかに進んだのかは多角的に論じなければならないが、核家族化により閉鎖的家族が現出し、緊密な母子関係を通じて教育意識が高まるようすをこの雑誌から読み取ることも可能であろう。

しかし、これらは男性的視点から描いた理想の家族像ともいえる。常に「良き母、良き妻」であらねばならぬとの教育的提言には、押しつけがましさを感ずる女性読者もいたようである。第1号が16頁、第2号が32頁、第3号が48頁と号が進むにつれ長文の論説が続き、サーミー自身も「淑女諸君はここまで私が書いて来た事柄に、おそらく退屈した (canınız sıkıtı) であろう」と文中で述べるほどであった<sup>22</sup>。『家族』誌は3号で打ち切りとなったが、サーミーはその後1893-94年に新たな女性への啓蒙の書として『婦人たち (Kadınlar)』を著している。この著作では、アメリカの小学校で働く女性教師を引き合いに出しながら、帝国内の小学校でも同様に女性教師の数を増やすべきとし、女性への教育の必要性を訴えている<sup>23</sup>。その一方で女性のなかでは、「家族 (家庭) 婦人 (aile kadını) がもっとも重要であると一貫した主張を繰り返す<sup>24</sup>、サーミーの理想とする女性は、近代家族を支えるに必要な知識と教養を兼ね備えた女性であった。

### (3) 『花園 (Şükûfezâr)』(1887) 1-5号

アリーフェ (Arife Hanım) を発行責任者 (sâhibe-i imtiyâz) とした帝国初の女性による女性のための雑誌である。アリーフェは第3代公教育省大臣ミュニフ・パシャ (Münih Paşa) を父に首都で生まれ、1870年開校の女子師範学校 (Dârülmua'llimât) を卒業した、いわば近代女子教育を受けた新しい世代の人物であった。ミュニフ・パシャは先にあげた教育・啓蒙団体「オスマン学術協会」の運営に携わっており、印刷所は明記されてはいないものの、その支援のもとに出版されたと考えられる。第1号の冒頭に「教育を受けた女性のための雑誌」(mektepli kadın dergisi) と記されたように編集に携わり、記事を共に執筆した Münire, Fatma Nevber も同じく女子師範学校卒の経歴をもつ女性たちであった。アリーフェは発行の目的を以下のように述べる。「私たちは髪の毛は長くとも、それに見合う知性が足りない (Bizimdeki saçı uzun akli kısa) と男性たちに揶揄される集団である。これに反した存在であることを証明しようと努める」<sup>25</sup>。また「政治以外のどんな問題についても言及していく (siyasattan başka her şeyden bahsedebilecektir)」<sup>26</sup>と表明している通り、文学、思想、詩、社会評論等を毎号発表し、家事、育児、子どもの教育等を中心とした記事で構成されるこれまでの女性雑誌とは一線を画している。これはアリーフェの「私は女性であるまえに文筆家である」との自負からも窺えるように、『花園』紙では、女性の読者を想定しつつも、自らの女性性に依拠せず、社会の矛盾に意見しようとする姿勢を認めること

ができる。例えば「人類の進歩 (terakkiyat-ı beşeriye)」は人間を作ったが、(その進歩に) 奉仕 (hizmet) する面では女性も男性も何ら違いはなく、例外なく平等であることに努めねばならない」と述べ、女性の人間としての平等性に言及しながら論じようとしたところに視点の新しさがあった。しかしながら、いずれのテーマにおいても近代教育が女性の解放や自己実現に道を開くと安易に結論づける理想主義的側面があった点も否めない。

博士 (doktor)、あるいは作家 (edip)、医師 (hekim) がのぞまれた形で社会 (heyet-i içtimâiye) へ貢献しているように、大工 (marangoz) やお針子 (dikişçi kadını) ものぞまれた形で社会へ貢献していることに相違はない。全ての努力は賞賛に値し、評価されよう。しかし大工やお針子は博士や小説家や医師の働きぶりよりも一段低く見られている。このように考えるなら、(社会で) もっとも苦勞が報われるのは、知識の修得 (tahsil-i ilm) や教育 (maarif) に向けた努力である<sup>27</sup>。



(写真1)

主筆のサーミーと妻エミネ

『帝国年鑑 (Devlet Salnâmesi)』によると、当時女子師範学校卒の「教育を受けた女性」は70名弱であり、そのほとんどが支配層の出身であったことを考えれば、教育を受け努力すればどんな女性も小説家や医師になれると述べても説得力がない<sup>28</sup>。しかも、当時は女子には高等教育へのアクセスがなく、オスマン帝国内に留まる限り、博士 (研究者) や医師になる道は事実上閉ざされていた<sup>29</sup>。当時のオスマン社会における階級性の視点が欠落していたとはいえ、このエリート女性たちが女子教育につき、これまでのような家庭内での幼児への教育の問題から青年期の女性教育のありかたへと議論を深化させた意義は大きい。さっそく、第2号には女子師範学校卒のF (Darülmua'llimâtın F) と名乗る読者から「この一ヶ月の間、発行されるのを心待ちにしていました」との感想が寄せられ、新しい教育を受けた女性たちの間では一定の支持を得ていた<sup>30</sup>。『花園』は5号で廃刊となったが、男性編集者中心の女性雑誌づくりに一石を投げ、後の『買い物袋 (Parça Boşçası)』(1887)、『婦人専門新聞 (Hanımlara Mahsûs Gazete)』(1893) や『女性世界 (Kadınlar Dünyası)』(1913) 等の一連の女性雑誌における女性編集者の台頭を生むきっかけとなった。

1880年代には他に『人間 (İnsâniyet)』(1883)、『婦人たち (Hanımlar)』(1882) 『めぐみ (Mürüvvet)』(1885) が創刊された。いずれも女性の啓蒙を目的とし、家庭を中心とした知識や女性に関する社会情報の発信を基軸としつつ、女性の投稿欄を設け、読者との交流に応えながら紙面づくりを行っていた。

(4) 『婦人専門新聞 (Hanımlara Mahsûs Gazete)』(1895) 1-580, 1-43. (写真2)

90年代になると、1893年に『婦人専門新聞』が創刊された<sup>31</sup>。この新聞は150号まで週2回、その後週1回1908年までの13年に亘り、計623号発行された<sup>32</sup>。第1号の冒頭には「品性と礼節ある言葉 (kemâl-i edeb ve iffet) で書かれた婦人向けの様々な事柄、役立つ読み物、日々の情報を発信する」と創刊の趣

旨が説明されている<sup>33</sup>。発行責任者はイブニユルハック・メフメト・ターヒル (İbnülhakki Mehmed Tahir) で、編集はターヒルの他に女性を含む7名 (Makbule Leman, Nigar Osman, Fatma Sadiye, Mustafa Asım, Faik Ali, Gülistan İsmet) が担当した。第1号によれば、この雑誌の目標は「どんな形であれ、女性たちの考えを公表 (tevsi '-i malumât) し、知識を増やすこと」に努めることであり<sup>34</sup>、女性寄稿者のなかには作家で評論家のファトマ・アーリエ (Fatma Aliye) や詩人のニギヤール・ビンティ・オスマン (Nigar binti Osman) 等がいた。男女の執筆者ともに女性の地位向上や教育機会の平等など、フェミニストとしての主張が顕著となったのもこの雑誌の特徴である。例えば、ファトマは男女の平等性について、女性が文明社会で前進するために、ときに障害となるのは男性であると断じ<sup>35</sup>、これまでの女性雑誌が掲げた「良き母、良き妻」への啓蒙運動とは異なる視点を女性の側から提起していた。その一方で、この新聞では少女向けのコーナー (kızlara mahsûs kısım) や洋装のモード (elbise patronu) の紹介頁を設けるなど、毎号幅広い年代やさまざまな背景を持つ女性の要望に応えた。例えば、検閲対象の政治の話題はなかったものの、教育、保健衛生、世界のニュース、詩文、小説、翻訳、ファッション、流行、格言、星占い、パズル、読者からの手紙、広告、告知等どちらかといえば、雑多なトピックと種類豊富な写真やイラストから紙面構成がなされていた。このような女性新聞の大衆化は、アブデュルハミト2世治世下の女性をとりまく社会や風俗の変化と関わる。スルタンは1878年に帝国憲法を停止し「専制」政治に移行させる一方、女子の初等・中等教育の普及に尽力するとともに、ヴェールの着用を禁じて婦人服の西欧化を促す等、女性の社会進出の要因を作った<sup>36</sup>。女性の活動範囲の広がりには、広告や告知面からも窺える。告知欄は主にイスタンブル在住者の情報交換の場ともなっていた。以下に37号の告知欄を紹介しよう。

一人のムスリム婦人がフランス語を習うことを望んでいるので、フランス語が堪能 (lâiyıkyla vakıf olan) で、この言語を教えたいと願うムスリム婦人は我々編集部に申し出て下さい。

また、編集部が医師や薬局を紹介する場合もあった。

オスマン朝の優秀な医師の一人で、女性と子どもの病気を注意深く診察することで評判の上記の医師は、毎日8時から夕方までパフチェ門ハミディエ墓地の向かい4番、イギリス人のN.Kanzuk薬局にいます。希望者を新しい方法で治療すると特別にお知らせします。困窮者 (fukara) もいつでも無料で快く受け入れています。

なお、記事を頼りに薬局を利用した読者からの投稿もあった。

新聞の告知欄で警察署前の官庁通り (divan yolu) にムスリムの薬局が開店したと知り、この薬局に向向いて申し込みました。処方箋を注意深く作って下さり診察の新しさに本当に満足しました。親愛なる私た



(写真2)

ちの新聞が私たちにこれほど立派で信頼のおける葉局を勤めて下さったことに感謝いたします。バヤズィッド地区在住ラティーフエ<sup>37</sup>

『婦人専門新聞』が比較的長命であった理由は、『婦人版進歩』紙から続く女性誌の性格を継承しつつも、時宜に適ったニュースを扱う生活情報誌の役割も担うことで、実用的な大衆紙として女性読者の支持を得ていたからであろう。この新聞は「専制」が終焉を迎える頃、13年にわたる活動の幕を閉じた。第二次立憲政下で、女性誌は地域に密着した生活情報誌と小説や政治評論を含む論説類を発表する月刊、季刊誌へと次第に二別されていくこととなった。

### Ⅲ. 19世紀後半の女性誌興隆の背景と意義

#### (1) 女性とリテラシー

女性誌の出現の背景には、都市部での女性の識字率の向上が考えられるだろう。オスマン帝国における公教育の制度化は1869年の公教育法 (Maarif-i Umûmiye Nizâmnamesi) の発布を嚆矢とする。ここにおいて男児は7歳から11歳まで、女児は6歳から10歳まで就学し継続的に学校に通うよう義務づけられた。その一方で同年に婦人誌の第1号、『婦人版進歩』が誕生していたから、制度化以前から識字能力を備えた女性は相当数存在していたといえる。この点、秋葉は18世紀末期のイスタンブルで、女児が女性教師に習う学び舎が担保され、リテラシー教育が徐々に浸透していた可能性を指摘した<sup>38</sup>。また、1859年にイスタンブルで女子中等学校が他の女子校に先駆けて開校された事実も踏まえれば、『婦人版進歩』の読者層も想定できよう。ただし、読者の投稿の内容から、家庭で文字を知る男性の助けを借りて読む、または投書の代筆を頼む事例が散見されるから、創刊当時必ずしも女性の読み書く能力が等しく社会に行き渡っていなかった。とくに家庭教育のみで、書く能力を身につけるのに苦勞したようである。例えば、前出の投稿者ベルケスは、「私たち (女性) は子どもの時分に父母から文字のいろは (alefbe) を習い、コーランや道德の冊子を読み、次に女性教師 (hoca kadınlar) について入門的な本を読むことを続ける。しかしその後は私たちの何人かが父親について、歴史や文学の本を読むにとどまる」とし、さらに「実際、男性たちに比べて女性たちで書くこと (yazı yazmak) を知る者は、それほど多くない。読み (okumak) を知っている者も100人のうち50人ほどであろう」と概観する<sup>39</sup>。この女性は新たに知見を得るために読む能力も必要ながら、書くことにこだわり、前述のように文筆力を養う為に、女性誌への投稿を続けていたのである。

当初「啓蒙」を目的に出版を許可された女性誌のなかでも、女性のリテラシーについての考え方は異なっていた。『家族』のサーミーによれば、リテラシーは家庭で学齢期の子どもに読み聞かせるのに必要な母親の心得ととらえていた。一方、『花園』の女子師範学校出のアリーフェはそれを自己実現の手段ととらえ、雑誌を学校教育 (mektepli) で培った文筆力を自由に発揮できる場と考えていた。両女性誌が発行された80年代の『帝国年鑑』をみると、1881-1882年のイスタンブルの初等学校 (sıbyan mektebi) の数は男子校122、女子校95校であり、また、1882-1883年の首都の女子中等学校は10校であった。この女子中等学校の生徒総数は418名で卒業生は6名に留まっていた<sup>40</sup>。このデータを見る限り、中等教育を修了し女子師範学校に進学した『花園』の編集者たちがごく限られた女性たちであることがわかるだろう。ただし、アブデュルハミト2世治世の半ばになると、女子中等学校が地方に開かれ進学者も増えるにつれ、女性たちは自身が身につけたリテラシーを家庭のみならず、他の何に使うのかを問題視していくようになった。『婦人専門新聞』ではしばしば女子の中等教育修了後の進路が話題になった。例えば、女子教育への

意見 (mütalâa) を4回 (1895, 20-23号) に分けて特集を組んでいる。以下に一部を紹介する。

娘の教育問題は、文明の当初から問題になっており今までよく話されて来た問題である。女性は科学と諸学の一部の教育を受けられない。(中略) どの文明国でも男性の学校に見合う女性専門の学校、学習所 (terbiyehâne) が開かれた。しかし、欧州やアメリカでは女性たちは男性たちが学ぶあらゆる知識を得ようと強く望んでも、落ち込む (mahrum) ことはない。なぜなら、(これらの国の) 大学では女性も入学でき、医学も法学も学べるからだ<sup>41</sup>。

ここでは、もはや『婦人版進歩』や『家族』に認められた「良妻賢母」に必要なリテラシーは語られず、オスマン帝国では未だ実現されない女子の高等教育の必要性について議論されている。

以上のように、初期女性誌の変遷から、女子のリテラシーが家庭や公教育を通じて浸透したようすが窺える。そこにおいて女性誌は新たな知見を付与するとともに、さまざまな教育環境に身をおく女性たちに投稿を通じて言論の場を提供していたといえるだろう。

## (2) 女性誌をめぐる経営と検閲問題

『婦人専門新聞』が発行される以前の女性誌は比較的どれも短命であった。その理由としては、おそらく購読者数を把握しつつ発行するのは困難であったからだろう。『婦人版進歩』新聞の場合、販売所をイスタンブールの中心部とボスフォラス海峡沿いの街の11カ所に設けて、週1回一部1クルシュで販売した。しかし新聞を直接販売所で求める女性は少なかったと思われる。何人かの投稿者によれば、父親や家族の男性に頼んで購入してもらい、専売所で購入できない遠方の者は、半年分 (22クルシュ) または年額 (45クルシュ) を払って予約講読をした。予約講読制の導入によって、発行部数の見積もりが可能となったと考えられる。当初はイスタンブール近郊在住者を対象としたものの、この予約制度の開始でソフィア、イシュコドラ、トラブゾン等の地方都市に住む女性にも届けられるようになり、読者層の幅が広がった。この予約申し込み制は『家族』や『婦人専門新聞』にも受け継がれた。『家族』の場合、一部が100パラで、購読者になるとイスタンブール居住者は半リラであった<sup>42</sup>。『婦人専門新聞』の場合、イスタンブール居住者の場合は年額60クルシュ、半年30クルシュで、地方都市在住者の場合は年額80クルシュ、半年40クルシュで、外国居住者の場合は年額17フランを支払うことになっていた。

予約講読制は一定の収入があらかじめ担保されたから、毎号の売り上げに左右されずに経営を進められる利点があった。しかしながら、健全経営を保つのは難しく、発行責任者のメフメト・ターヒルは、1895年以降度々財務省に、自分が発行人となる他の新聞の収益を『婦人専門新聞』の運転資金に転用できないか陳情している<sup>43</sup>。また『婦人専門新聞』にはイスタンブールの個人店舗、自営業者の宣伝広告、他誌の紹介などが掲載されたから、広告による副次的収入、販路と読者層の開拓を目指していたのであろう。このような雑誌経営の苦勞やノウハウは、大衆紙が台頭するアブデュルハミト2世後半期、及び第二次立憲政期以降の出版メディアに継承されていったと考えられる。

次に女性誌と検閲制度について述べておきたい。帝国内で新聞、雑誌を発行するには官許を得なくてはならなかったが、アブデュルハミト2世期には印刷条令を二度改訂し (1888年、1895年)、新聞、雑誌類は出版前に事前に検閲を受けるのが義務づけられた。その対象は当初政治分野のみであったが、その後それ以外にまで広げられた。『婦人専門新聞』は当局の許可 (ruhat) なく小説『八王の物語』『傷心 (Dilfigâr)』を印刷したため、回収のうえ破棄 (imha) するように命じられた<sup>44</sup>。出版条令の規定通り、

公衆の風紀、道徳を乱すと判断されると女性誌にも当局の圧力がかけられていた。

## おわりに

19世紀後半に生まれた主にムスリム「女性」の啓蒙を目的とした新聞・雑誌は政府の言論統制はあるものの、編集者、読者の双方が参加する新たな言論と知識・情報の共有の場となっていた。週刊誌は時宜に合った地域性のある生活情報を提供し、イスタンブル在住の女性たちの需要に応えた。一方、月刊誌や不定期発行の雑誌は、家政と育児、子どもの教育問題等のテーマで特集を組み、ときには読者をまじえて白熱した議論に発展することもあった。

女性誌でもっとも関心の高かったのは、女兒や女性の教育問題であった。この点『婦人版進歩』では投稿者の多くが自身の教育環境やリテラシーの欠如から来る個人的な悩みを吐露していたに過ぎないが、時代を下った『婦人専門新聞』では、リテラシーの有無はもはや問題視されず、女子の高等教育機関を未だ設けない帝国の教育制度のありかたへの批判に変わっていた。この批判は公教育制度の普及を意味するとともに、教育によって階層移動が可能な男子との比較を視野に入れている点も注目すべきであろう<sup>45</sup>。『家族』でサーミーが熱心に説いた母子密着型の家庭教育の効果も、女子の場合、国家の教育システムが整わない限り先が見えないままであった。「啓蒙」を目的に発行された女性誌がジェンダーの視点から社会の矛盾を問う場として機能し始めたともいえるだろう。

告知欄を通じた女性の情報交換や活動のようすを見ると、女性誌は活字情報のメディアにとどまらず、女性相互の連帯を促す結節点ともなっていた。ムスリム女性の活動領域の拡大は、第二次立憲政期以降に顕著となる婦人の多様な社会参加の形態に通じるものがある。今後は、青年トルコ革命期を含め、国民統合の観点から女性誌と女性の社会参加との関わりを読み解いていくことを課題としたい。

## 注

- 1 Kurnaz 1990; Çakır. 1994 (本稿では2011年発行の第3版を使用)。
- 2 Frierson 1996.
- 3 Toska, Zehra, et al. 1993. ここには各雑誌の目次と所蔵情報が掲載されている。なお本稿はこのカタログに記載されたオスマントルコ語の新聞・雑誌類を分析の対象とした。同時期に帝国内では、アテネ発行のギリシア語『女性新聞』が正教徒の間で読まれていた。藤波2014.
- 4 オスマン近代のジャーナリズム事情については石丸1991を、帝国内の多言語による出版文化と社会的影響については佐々木2014の専論を参照されたい。
- 5 具体的にはギリシア正教徒の女性を指した。
- 6 100クルシュ(銀貨)が1リラ(金貨)に相当し、19世紀後半において1オッカ(1.283kg)のパンの価格が平均して1-2クルシュであった。Pamuk, "Kurus," in *DİA*.
- 7 *Terakki* 5 (1868); Frierson 1996:109.
- 8 例えば、3人の女 (Üç hanım)、読み書きを知らないと述べる匿名者がいた。 *Terakki* 104 (1968); *Terakki* 83 (1968); Çakır 2011: 59-60.  
近代オスマン帝国初の「人口調査」(tahrir-i nüfus)は1885年に行われ、調査を受けた者には証明書(nüfus tezkeresi)を交付した。ここで初めて女性が個人として認められた。
- 10 例えば、第3号では社説の他に7本の論説、3本の投書が掲載されており、記名のあるものは、Belkes, Adile, ペンネームMaarifi Sever Bir Hanım(お勉強好きなお婦人)であった。*Terakki-i Muhadderât* (1869) 3.

- 11 *Terakki-i Muhadderât* (1869) 6, 20, 39.
- 12 *Terakki-i Muhadderât* (1869) 3: 3. 訳文中の ( ) 内は松尾が補足。
- 13 *Terakki-i Muhadderât* (1869) 4: 3-4.
- 14 *Terakki-i Muhadderât* (1869) 5: 3-4.
- 15 *Terakki-i Muhadderât* (1869) 10: 3.
- 16 *Aile* (1880) 1: 1.
- 17 Duben & Behar 1991: 8-32.
- 18 *Aile* (1880) 1: 1-2.
- 19 *Aile* (1880) 2: 30-31.
- 20 児童誌は1869年の『分別 (*Mümeyyiz*)』に始まる。
- 21 Ph.アリエス1980; 太田・浅井2012: 16.
- 22 *Aile* (1880) 1: 4.
- 23 Sami 1879: 21-46.
- 24 Sami 1879: 69-95.
- 25 *Süküfezâr* (1887) 1: 1.
- 26 *Süküfezâr* (1887) 1: 1-2.
- 27 *Süküfezâr* (1887) 1: 3-9.
- 28 『オスマン帝国年鑑』を見ると、1872-73 (H.1289) 年から1887-88 (H.1305) 年までの女子師範学校の生徒数、教員数、卒業生の推移を見ることができる。1882年から1887年までの卒業生数を合計すると、約70名である (*Devlet Salnâmesi* 1300: 192-193, 1301: 378-79, 1302: 400, 1303: 324-25, 1304: 312, 1305: 229; Kurzaz 2011: 56-57.)。
- 29 女子の高等教育機関が開かれたのは、1913年で、女子師範学校に3年制の高等師範部 (*Dârümuallimât-ı Aliye*) が設立された。欧州への女子留学生制度が開始されるのは、第二次立憲政期以降である。
- 30 *Süküfezâr* (1887) 2: 20-21.
- 31 この雑誌から見たオスマン女性の日常生活についてはEnis: 2013を参照。
- 32 580号発行の後一時休刊し、新たに1号から発行を再開した。
- 33 *Hanımlara Mahsûs Gazete* (1893) 1: 1-2.
- 34 *Hanımlara Mahsûs Gazete* (1893) 2: 1-2.
- 35 *Hanımlara Mahsûs Gazete* (1893) 2: 2-3.
- 36 アブデュルハミト2世が禁止した理由は、黒いヴェールを身につけたムスリム女性と喪服姿のギリシア正教徒の女性との区別をつけるためとも言われている。この時代のムスリム女性の服装については、Bulut 1968: 34-35.
- 37 *Hanımlara Mahsûs Gazete* (1896) 37: 3-4.
- 38 秋葉2013: 84-97.
- 39 *Terakki-i Muhadderât* (1869) 4: 3-4.
- 40 *Devlet Salnâmesi* 1299: 267, 1300: 24.
- 41 *Hanımlara Mahsûs Gazete* (1895) 20: 1-2.
- 42 パラとは「お金」を指すトルコ語であるが、19世紀末では通貨単位ともなっていた。1クルシュが40パラであった。
- 43 BOA. BEO 655-49074; DH.MKT. 672-6.
- 44 BOA. MKT. 662-10; İ.TAL.161-43.
- 45 1856年の改革勅令では、ムスリムと非ムスリムとの教育機会の平等、非ムスリムの帝国官僚への任用が保障された。男性の場合、出自を問わず教育程度により階層移動が可能な社会が実現しつつあった。

参考文献

史料

- Başbakanlık Osmanlı Arşivi (İstanbul): BEO 655-49074; 831-62321; 1168-87547; 1191-89270; DH.MKT 662-10; 672-6; 1014-47; 1239-61; 2074-68; İ.TAL 161-43.
- Salnâme-i Devlet-i Aliyye-i Osmaniye*, 1288-1305.
- Aile* (『家族』) (1880)
- Hanımlara Mahsus Gazete* (『婦人専門新聞』) (1893-1908)
- Şüküfezâr* (『花園』) (1883)
- Terakki* (『進歩』) (1868)
- Terakki-i Mubadderât* (『婦人版進歩』) (1869)
- Sâmi, Şemseddin. 1879. *Kadınlar*, İstanbul.
- Çiçekler, Mustafa and Fatih Andı, eds. 2009. *Yeni Harflerle Hanımlara Mahsus Gazete (1895-1908) : Seçki*. İstanbul: Kadın Eserleri Kütüphanesi ve Bilgi Merkezi Vakfı,

研究文献

- Bulut, Rukiye. 1968. "İstanbul Kadınlarının Kıyafetleri ve II. Abdülhamid' in Çarşafı Yasaklaması." *Belgelerle Türk Tarihi Dergisi* 8: 34-35.
- Çakır, Serpil. 2011. *Osmanlı Kadın hareketi Genişletilmiş ve gözden geçirilmiş (3. Baskı)*. İstanbul
- Duben, Alan & Cem Behar. 1991. *İstanbul Households Marriage, Family and Fertility, 1880-1940*. Cambridge University Press.
- Enis, Ayşe Zeren. 2013. *Everyday Lives of Ottoman Muslim Women: Hanımlara Mahsus Gazete (1895-1908)*. İstanbul.
- Frierson, Elizabeth Brown. 1996. "Unimagined Communities: State, Press, and Gender in the Hamidian Era." PhD diss., Princeton University.
- Kurnaz, Şefika. 1990. *Cumhuriyet Öncesinde Türk Kadını 1839-1923*. İstanbul.
- \_\_\_\_\_. 2011. *Yenileşme sürecinde Türk Kadını*. İstanbul.
- Pamuk, Şevket., "Kuruş," *Türkiye Diyanet Vakfı İslam Ansiklopedisi (DİA)*.
- Toska, Zehra, et al. 1993. *İstanbul Kütüphanelerindeki Eski Harfli Türkçe Kadın Dergileri Bibliyografyası (1869-1927)*. İstanbul.
- 秋葉 淳 2013. 「タンシマート以前のオスマン社会における女子学校と女性教師：18世紀末-19世紀初頭イスタンブールの事例から」『オリエント』 56 (1): 84-97.
- Ph. アリエス 1980. 『〈子供〉の誕生』(杉山光信・杉山恵美子訳) みすず書房。
- 石丸由美 1991. 「オスマン帝国ジャーナリズム事情 (1831-1908)」『オリエント』 34 (2): 110-124.
- 太田素子・浅井幸子編 2012. 『保育と家庭教育の誕生 1890-1930』藤原書店。
- 佐々木紳 2014. 「ジャーナリズムの登場と読者層の形成—オスマン近代の経験から」秋葉淳・橋本伸也編『近代・イスラームの教育社会史』 113-137, 昭和堂。
- 藤波伸嘉 2014. 「帝国のメディア専制、革命、立憲政」同書 242-268.

[付記] 本稿は日本学術振興会科学研究費「近代オスマン帝国における女子教育」基盤研究C (課題番号 24520797) の助成による研究成果である。